

巻 頭 言

藤 永 太 一 郎*

昨年度は海洋化学研究所がいわば再出発を決意した年であったが、事実よくこれだけの事業が実施できたという感慨がある。

石橋雅義先生の海洋化学にかけられた御遺志を享けて設けられた海洋化学学術賞の第1回受賞者には、京都教育大学 山本俊夫教授が選ばれた。その長年にわたる研究業績「海藻に関する生物地球化学的研究」については本誌前号に収録されている。

ついで11月10、11、12日の3日間にわたって International Symposium on New Sensors and Methods for Environmental Characterization 環境分析と新検知器国際会議（通称SMEC）を京都会館において開催した。この国際会議は当研究所（RIOC）にとっては初めての国際会議であり、荷の重いものであったが、国際純粋応用化学連合（IUPAC）、日本化学会（CSJ）、日本分析化学会（JSAC）が共催して下さり、特に日産科学振興財団（NSF）が殆どすべての必要経費を負担下さるような御英断を頂いたお陰である。参加人員は273名、うち11ヶ国30名の海外からの参加者があり、招待の総合講演14件を含み127件の研究発表があった。この成功には京都大学化学研究所 松井正和委員長以下本研究所関連の多くの実行委員の御協力があつたお陰であり、筆者は組織委員会を代表して厚くお礼を申し上げねばならない。

上記国際会議の要旨については前号に掲載したが本号では東京講演会の特別講演について収録した。これらは今後の研究の資として読者に大きく役立つものと期待している。

今日、学術の研究と教育のあり方について格別世上の批判が著しい。その理由は主として経済と学術の急進展に即応していないという事のようなのである。果してそうであろうか。今世紀初頭に相対性理論と量子力学の展開があつたが、この頃の学問の急進展こそは目をみはるものであつた。相対性理論は世界に三人しか理解できるものが居なかつたといわれた程である。科学者の目でみれば、それ以降の進展は関連技術の進歩、いわば大部分が落穂ひろいといつてもよいような展開に過ぎない。単にその落穂が多額の経済効果を生んでいるだけである。そこで、エネルギー・資源・情報に関する基礎研究を振興しよう、というような政財界人の発想が生れるのであろうが、科学者までがそのような学問があるような錯覚をおかしてはならない。ポアンカレがやはり今世紀の始めに、その科学哲学の中で述べた「科学者は真実を追求することに愉悦を感じるが故に研究するのであり、真実が美しいが故に愉悦を感じるのである」という言葉を想起しよう。この意味において、海洋化学の研究こそは実は真の学問なのである。

*（財）海洋化学研究所 理事長